

MIRU2006 若手プログラム報告

天野 敏之[†] 岩村 雅一^{††} 岡部 孝弘^{†††} 加藤 毅^{††††} 玉木 徹^{†††††}

若手プログラム参加者 内田 誠一^{††††††}

[†] 名古屋工業大学大学院工学研究科 〒466-8555 名古屋市昭和区御器所町

^{††} 大阪府立大学大学院工学研究科 〒599-8531 大阪府堺市中区学園町

^{†††} 東京大学生産技術研究所 〒153-8505 東京都目黒区駒場

^{††††} 東京大学新領域創成科学研究科 〒277-8561 千葉県柏市柏の葉

^{†††††} 広島大学大学院工学研究科 〒739-8527 広島県東広島市鏡山

^{††††††} 九州大学大学院システム情報科学研究所 〒819-0395 福岡市西区元岡

E-mail: uchida@is.kyushu-u.ac.jp

あらまし 2006年7月、仙台市青年文化センターにて画像の認識・理解シンポジウム MIRU2006 が開催された。その併設イベントとして、若手研究者の活性化および相互交流を図ることを目的とした「若手プログラム — 突撃インタビュー！先人の成功と失敗に学ぼう」を開催した。本稿ではまず企画概要を述べた後、若手研究者が先輩研究者に対して行ったインタビューについてダイジェスト形式で報告する。

キーワード 若手プログラム, MIRU2006, インタビュー

A Report on MIRU2006 Young Researchers' Program

Toshiyuki AMANO[†], Masakazu IWAMURA^{††}, Takahiro OKABE^{†††}, Tsuyoshi KATO^{††††},
Toru TAMAKI^{†††††}, Participants in MIRU Young Researchers' Program 2006, and

Seiichi UCHIDA^{††††††}

[†] Nagoya Institute of Technology, Gokiso-cho, Showa-ku, Nagoya, Japan

^{††} Osaka Prefecture University, Gakuen-cho, Naka, Sakai, Osaka, Japan

^{†††} The University of Tokyo, Komaba, Meguro-ku, Tokyo, Japan

^{††††} The University of Tokyo, Kashiwanoha, Kashiwa, Chiba, Japan

^{†††††} Hiroshima University, Kagamiyama, Higashi-Hiroshima, Hiroshima, Japan

^{††††††} Kyushu University, Motooka, Nishi-ku, Fukuoka, Japan

E-mail: uchida@is.kyushu-u.ac.jp

Abstract MIRU Young Researchers' Program was held in conjunction with MIRU2006 symposium for promoting exchanges between young researchers in CV and PR. This report gives a summary of the program.

Key words young researchers' program, MIRU2006, interview

1. ま え が き

PRMU 研究会では、画像の認識・理解シンポジウム (以下、MIRU) の併催企画として、若手プログラムを実施している。具体的には 2000 年から 2004 年まで^(注1)、以下の企画内容で実施

されてきた。

- MIRU2000... 発表を肴に 2 1 世紀のビジョンを語ろう～MIRU2000 を 2000 倍活用する～ [1]

- MIRU2002... 使わぬなら、使わせてみせよう、CV 技術～研究者の視点、利用者の視点からみたコンピュータビジョ

(注1) : 2000 年以前は MIRU とは無関係に、若手セミナーと呼ばれる企画が実施されていた。また、MIRU 自体は 2005 年より毎年開催となっている。一方、

若手プログラムについては従来の隔年開催の方式を踏襲し、2005 年は開催されなかった。

ン～[2]

- MIRU2004…ほんとうに動かしてMIRU? [3]

今年7月に仙台市青年文化センターにて開催されたMIRU2006においても、これらに引き続き、4回目の若手プログラム企画を実施した。

今回の若手プログラムでは、若手研究者が自分達で選んだ「あこがれの先輩研究者」にインタビューするという企画—突撃インタビュー!先人の成功と失敗に学ぼう—を実施した。本企画の第一の目的は「若手研究者の縦のつながりと横のつながりの強化」である。これまでの若手プログラムでも若手間の交流をその目的に含んでいた。しかし、本企画では交流の強化を特に重視しており、横のみならず縦の交流をも図ることを目指した。第二の目的は、先輩研究者の含蓄に富んだ人生経験を直接会って聞き出すことにある。「直接会う」という点が重要であり、若手研究者が研究分野で生きるための勇気と感動を体得することに期待した。これら2点の目的達成のために、本企画においてアカデミックな側面は割愛されている。

本報告のメインは、参加者が実際に先輩研究者に突撃し、感動のうちに自らまとめた、インタビューの概要である(第5章)。インタビューを文書化することは大変難しく、特に雰囲気や感動、興奮を伝えるに至っては至難の業である。また、紙数の都合により、ダイジェスト版とせざるを得なかった。インタビューによって彼らが得たものを行間から想像いただきたいと思う。なお本報告では、前置きとして企画運営の概要についても述べる(第2-4章)。今後の若手プログラム開催の参考になれば幸いである。

2. 企画準備および参加者募集

2.1 企画準備

2005年5月から実行委員およびテーマの選定を開始し、2005年7月のMIRU2005の会場で確定した。実行委員は天野敏之(名古屋工業大学,主に会場担当),岩村雅一(大阪府立大学,主に副企画担当),岡部孝弘(東京大学,主に会計担当),加藤毅(東京大学,主に広報担当),玉木徹(広島大学,主に主企画担当),および内田誠一(九州大学,とりまとめ)により構成された。内田を除いた全員が30代前半の気鋭の研究者ということもあつてか、互いに非常に活発に議論しながら、企画実施の準備を進めていった。

前述のように、縦のつながりと横のつながりを強化することを目的として、若手研究者が先輩研究者にインタビューするという企画に決定した。その際、金子俊一先生(北海道大学)にインタビューとしてご協力頂き、実行委員でインタビューを実施することで、雑談にはない面白さが十分にあることを確認した。また、大学生によるインタビュー実施例[4],[5]も参考にした。

その他、インタビュー内容の発表会(4.1節)と横のつながりを強化するための副企画(4.2節)を企画した。特別講演や学術的議論も一時提案されたが、今回は交流強化という主目的に徹するというので実現には至らなかった。

2.2 参加者募集

MIRU2006の論文投稿時期とリンクさせて、2006年3月23

日から4月21日の期間に、参加者募集を行った。広報にはimageメーリングリストならびにMIRU投稿者リスト等を利用した。PRMU/CVIM会場でのビラ配布も行った。この募集期間が例年に比べ早かったということで、同年5月29日から6月14日まで2次募集を行った。結果26人の応募があった。

ホームページに参加申し込みフォームを準備した。このフォームには、どのようなインタビューが希望であり、さらに何が聞きたいかについて、比較的細かく記入させるようにした。これは、熱意のある参加者を優先的に募るための一種のハードルであり、過去の若手プログラム[1]~[3]で指摘されていた「参加者間の温度差」をなるべく起きないための工夫である。

希望インタビューの傾向により、参加者26名を3~4人からなる7つの班に分割した。その際、同じ研究室のメンバは同じ班にならないように配慮した。

3. 参加者によるインタビュー準備

前述のように、参加者間の事前交流の強化を図るべく、参加者にはインタビューに向けて様々な準備を共同して行ってもらった。準備項目は、以下に述べるように、かなりの量となった。結果、各班では100~200件のメールがやり取りされ、事前交流には非常に役に立ったようである。

まず各班から希望インタビューを2名選出してもらった。申し込み時の希望インタビューを参考に班分けを行ったが、班内で全員一致ということはほとんどなく、選出にはやはり各班とも議論が必要であった。自主性に任せるという原則から、選出に際して実行委員からの指示は一切行わなかった。選出の後、実行委員をインタフェースとして依頼のメールを希望インタビューに送付し、了承頂いた段階でインタビュー決定とした。

依頼のメール作成に際しては、単なる事務的な文章にしないように配慮した。具体的には、班のメンバ全員による熱意のこもった文章を添付させた。お互い顔も見えない者同士に、メールベースで文章を作成してもらったため、大変苦労したようであった。

インタビューが決まった後、参加者はさらに次の2つの準備を行う必要があった。第一は、インタビューの場所と日時の確定であり、参加者に直接インタビューと相談して決めてもらった。第二は、インタビュー内容の決定およびそのために必要なインタビューの経歴の調査であった。この準備は、文献[4],[5]でも指摘されているように、インタビューを雑談や形式的なものに終わらせないために非常に大切である。これら準備に際しても、参加者は班内で議論・調整を繰り返す必要があった。

4. 当日の実施状況

4.1 主企画

インタビューは、MIRU2006の会期中に、主としてその会場である仙台市青年文化センターで行われた。具体的にはロビーやオーラル会場裏の楽屋など、各班とインタビューで定めた場所において行われた。各班は、ボイスレコーダやDVカメラ等を準備し、インタビュー内容の記録に利用していた。自主性の観点から、実行委員はインタビューには同席しなかった。

他にも様々なインタビュー形態が見られた。例えば、MIRU に出席できなかった方とのインタビューでは、会場の一室にインターネットが引かれ、Skype（インターネットを介したテレビ電話）が利用された。さらには昼間に時間が取れない場合は、会場が開いた直後の早朝や、居酒屋でのインタビューも敢行された（終了は午前 0:30 だったそうである）。また MIRU 会場での一通りのインタビューの後、居酒屋に移動して続きを行ったという話も聞いている。

MIRU 最終日の翌日、仙台市青年文化センターの 1 室を借りて、インタビュー内容の整理、およびその発表会を行った。時間の制約上、インタビュー 1 人につき 5 分程度しか使うことができず、内容の整理集約に苦労していたようであった。その甲斐あってか、各班ともにプレゼンテーションはすばらしく、非常に面白く聞かせていただいた。5 分ずつではあったが、インタビューの方々の心に残る多くの話を全員で聞けたことは、参加者および実行委員にとって大きな収穫であった。各班のインタビューの内容のダイジェストを第 5 章に示す。



図 1 発表会

4.2 副企画

横のつながり、すなわち参加者間のつながりをさらに強化するべく、MIRU 開催前日の夜と、MIRU 最終日の夜（発表会の前夜）に、それぞれ副企画を実施した。具体的には、前日の副企画ではホテルを借りて「相互インタビュー」と「ミニポスターセッション」、最終日の副企画では居酒屋にて「懇親会」を実施した。



図 2 相互インタビュー

相互インタビューとは、班毎に円卓で軽食をとりながら、自己紹介を兼ねた雑談ならびにインタビューの最終打ち合わせを行ってもらうという 1 時間程度の企画である。各班とも、事前に 100 件以上のメールをやりとりしていたこともあってか、開

始とともに旧知の間柄であるが如く大変な賑わいとなり、驚かされた。引き続き、同じ会場でミニポスターセッションを実施した。これは各自が持ち寄ったポスター（内容に特に制約なし）を 3 回に分けて掲示し、互いに議論するものである。この企画についても、アカデミックな効果ではなく、相互インタビューの延長線として参加者相互の交流を目的としたものである。結果、大いに盛り上がり、時間が足りないのを嘆く参加者が続出した。終了後、明日以降のインタビューの打ち合わせのためであろうか、参加者一行が会場 1 階の喫茶店を占有して議論していた情景は、大変頼もしく印象的であった。



図 3 ミニポスターセッション

懇親会では、実行委員のほうで交流を促すようなゲームを実施したが、それは蛇足であったかと思えるほどの盛り上がりであった。インタビューも終了した段階での懇親会であり、すでに相当打ち解けていたのであろう。また、会話の相手は固定されず、絶えず人の輪が動いていたのも印象的であった。やはり時間の過ぎるのは速く、勢い余った大多数の参加者は 2 次会に行ったようである。



図 4 懇親会

5. 各班インタビューダイジェスト

本章では各班が行ったインタビューのダイジェストを掲載する。いずれもインタビュー終了後の数ヶ月間の議論を以って各班でまとめられたものである。（なお掲載内容については、インタビューの許可を頂いている。）

5.1 第 1 班：村瀬 洋 先生、和田 俊和 先生

- 班員：小野泰弘（東京大学）、神谷保徳（名古屋大学）、万波秀年（大阪大学）、満上育久（奈良先端科学技術大学院大学）
- 担当委員：天野敏之（名古屋工業大学）

5.1.1 村瀬 洋 先生 (名古屋大学)

アクティブ探索法やパラメトリック固有空間法で有名な名古屋大学の村瀬先生に MIRU 期間中である 7 月 21 日にインタビューをしました。インタビューでは先生の子供時代のお話から若いときに行うべき事といったお話まで、幅広い内容のお話をいただきました。私たちが村瀬先生にインタビューを依頼した理由に、企業の特徴をお聞きしたいという動機があったため、それに関する話をご紹介します。

【企業と大学での研究環境の違い】

企業の特徴の中で私達が興味を引かれた話として、企業からの強制力についての先生の体験談がありました。企業に勤められていたある時期に、研究の成果が少し出て、それを発展させれば面白い結果が次々と出せそうな状況があったそうです。しかしながら、その時、企業の方針で別の研究テーマをするように命ぜられたそうです。言われた当初はせっかく成果が出はじめている研究を止めることでとても残念だったそうですが、その機会に試行的に行った別の研究が海外の大学への足がかりになるなど、その後の新しい展開へとつながったと仰いました。結果的には企業の強制力が短期的な研究への思い入れや執着を断ち切る力になり、新しい事へ挑戦できる機会となった事から、企業の強制力には止むを得ない面だけでなく良い面もあると感じたそうです。「なるほど。」と思うとともに、この話に先生の「本質を見極めるために、シンプルに考える」という研究に対する心構えの一部を垣間見た気がします。

また上記の話にも関連しますが、全体を通して、「物事にはそれぞれ良いところ悪いところがあって、良いところ上手く生かしていくとすごくプラスになる。」という言葉に表されるように、村瀬先生は非常にポジティブな面を持っている人だと感じました。

指導しておられる学生の発表の時間であるにも関わらずインタビューをお受けいただいた上、研究者としてだけでなく、人としての生き方にも関わる貴重なお話をいただいた村瀬先生に心から感謝いたします。



図 5 第 1 班と村瀬洋先生

5.1.2 和田 俊和 先生 (和歌山大学)

非常に精力的に研究されている和歌山大学の和田俊和先生(先生の研究室から MIRU2006 最多の 14 件の発表)に、7 月 20

日(水)の夜 3 時間に亘って居酒屋でインタビューしました。笑いの絶えない和やかな雰囲気の中で、多岐に亘る貴重なお話を伺いました。「考える」というテーマに絞ってご紹介致します。

【粘着質に考える】

俳優の名前など、知っているのにどうしても思い出せない場合、和田先生は周囲の人に聞いたりインターネットで検索することにより安直に解決せず、時間がいくらかかろうとも四六時中考えて独力で思い出そうとされるそうです。それが頭を使うことの訓練になると仰っていました。

【当たり前と知っていることの原理を考える】

便利な道具に囲まれている私達の多くはその原理を知らないため、無人島に行くと原始人になってしまいます。文明人であるためには、あらゆることに疑問を持ち(例:「七夕」と「たなばた」の漢字と読みの対応関係は?), 当たり前と知っていることの原理(例:冷蔵庫の冷却原理は?)を日頃から考える必要があると仰いました。

【論理的に考える】

論文では破綻のない論理展開が必要です。しかし、実際に論理を組み立ててみると、その展開の中に論理的な根拠のない思い込みが入り込むことがあります。思い込みをなくし、客観的・論理的に考えることが大切だと仰いました。

和田先生がお持ちである発想力・行動力・人を惹きつける力は、「考える」ことによって習得していくものであると感じました。研究者にとって最も根本的なことを熱く説明していただきました和田先生に心から感謝致します。



図 6 第 1 班と和田俊和先生

5.2 第 2 班: 佐藤 洋一 先生, 前田 英作 様

- 班員: 入江 淳(オムロン株式会社), 島田敬士(九州大学), 市野将嗣(早稲田大学), 奥村文洋(奈良先端科学技術大学院大学)

- 担当委員: 玉木 徹(広島大学)

5.2.1 佐藤 洋一 先生 (東京大学)

まず、佐藤先生の経歴について紹介すると、Carnegie Mellon University で Ph.D. in Robotics を取得なされた後、東京大学に戻り、現在助教として様々な分野でご活躍中である。佐藤先生にお伺いした内容は多岐にわたるが、特に印象に残った点に絞って紹介する。

海外留学から感じたこと：

留学当初は英語で苦勞なされたが、意識して学ぼうとすれば何とかおっしやっていたのが印象的であった。また、素晴らしい成果であるにも関わらず国外で知られていないという例が見受けられるので、もっと海外へ発信する必要があるとおっしやっていた。

研究テーマの広がりについて：

佐藤先生はコンピュータビジョン以外にも、ジェスチャ認識などの幅広い研究分野をお持ちであるが、現在の研究テーマに至った経緯についてお伺いしたところ、興味のある分野を突き詰めていった結果であった。同時に、研究分野を広げていく事も重要であり、両者のバランスが重要であるとおっしやっていた。

理想の研究者像：

理想の研究者像として、研究を楽しむ、本質を考える、意見交換するといったキーワードを挙げられた。特に、意見交換については時間外のフリーディスカッションや研究会を活用することを薦めていらっしやった。



図7 第2班と佐藤洋一先生

5.2.2 前田 英作 様 (NTT コミュニケーション科学基礎研究所)

前田英作先生は、現在はNTT コミュニケーション科学基礎研究所で研究グループリーダーをされている。また、これまでに大学の訪問助教授などを兼務されるなど多岐にわたりご活躍されている。研究分野としては、パターン認識のみならず、知能統合などの幅広い研究分野に取り組まれている。

前田先生からお伺いしたお話しの中で、特に印象に残ったのは次の点である。

研究分野間の横断：

前田先生はご自身の研究歴の中で、統計機械学習と自然言語処理の両分野の研究に関わる機会をもったことで、異分野間における技術交流を図ることの重要性を強く実感されたという。前田先生はこれまでに、ご自身の研究分野でのノウハウを他の研究分野で講演されたり、「妖精・妖怪の復権」という題目で今後の科学技術発展には研究分野間での協調の必要性を伝えている。

大学と企業での研究のあり方：

企業の研究は、利潤追求を前提としなければならない一面もあるが、大学はその縛りが無いのが特徴。その分自由な発想が可能だが、知的資産としての研究成果を広く社会と共有する責務があるといわれていた。大学と企業の研究の共通部分としては、研究のプレゼンスをしっかりと示すことが重要であるという。

理想の研究者像：

「この分野については誰にも負けない」というくらいに言える専門分野を1つ持つことがとても大切なことであり、同時に興味の対象を広く持ち、隣の研究分野ではどのようなことが行なわれているのか目を向けることができる研究者が理想的であるといわれていた。

以上のように前田先生から研究のこと、研究活動の進め方などさまざまなことを伺うことができた。



図8 第2班と前田英作様

5.2.3 所 感

二人の先生が共通して挙げていたことは人とのつながりの重要性と、研究を楽しむことの重要性です。これらをふまえると今回の若手プログラムは我々にとって非常に有意義なものとなりました。ここで得たことを今後の研究人生に活かし、今回インタビューさせていただいた先生方を目標に努力していきたいと思えます。

5.3 第3班：池内 克史 先生、横矢 直和 先生

● 班員：岩下友美 (九州大学)、近藤一晃 (大阪大学)、水野宏基 (中部大学)、鍋嶋 累 (九州大学)

● 担当委員：加藤 毅 (東京大学)

5.3.1 池内 克史 先生 (東京大学)

池内先生へのインタビューでは、我々インタビュアーは特に文化遺産のアーカイブ化に関するお話に興味があったため、その内容を中心として様々なエピソードを聞かせ頂きました。先生が文化遺産のアーカイブ化に着手されたのは、「人命」「地球」など、大切に守っていかなければならない「かけがえのないもの」を列挙していく過程で思いつかれたのが発端と伺いました。「文化を守るエンジニアリング」という新分野の研究を最先端の技術で行っていく中で、素晴らしい新技術がスピノフされ、新しい領域を形成し、それが工業技術全体を引っ張っていくのではないかと仰られていました。また「自分で現場にとけ込ん

で作業をして良い問題にぶつからなければならない」ということの一環から、遺跡の計測は研究室総出で行っているということでした。それを通じて研究室メンバのコミュニケーションが円滑になるともお話しされていました。若手研究者に対しては、根性を持って、そしてやはり博士号は取った方が良いとのアドバイスを頂きました。博士号は自分で研究を行うことができるという資格であるので、国外では博士号を取っていないと通用しない面があり、また日本の学会のレベルを国際的に上げていくためにも、博士号を取って良いアウトプットを出して欲しいと仰られていました。



図 9 第 3 班と池内克史先生

5.3.2 横矢 直和 先生 (奈良先端科学技術大学院大学)

横矢先生へのインタビューでは、学生時代に始まり現在に至るまでの様々な体験談を聞かせて頂き、また我々若手研究者に対するメッセージも幾つか頂きました。横矢先生は情報科学分野の草分けとして研究を続けられてきたこともあり、当初は苦勞が耐えなかったというお話を伺いました。例えば、大学学部時代では学生運動の真っ只中という時代背景も重なり、頻繁に授業が無くなってしまっていたそうです。また、電総研時代では“SPIDER”と呼ばれる画像処理パッケージ開発のためCVアルゴリズムのサーベイに追われ、奈良先端大の創立時にはネットワークインフラ整備のための予算確保に尽力され、ご自分の研究をする時間がない時期が続いたと仰られていました。しかし、そのように自分の研究ができない時期があったとして



図 10 第 3 班と横矢直和先生

も、後になるとその経験が様々な場面で役に立つことが多いので、さほど悲観せず頑張ってもらいたいと、暖かいアドバイスを頂きました。一方、若手研究者に対しては、もっと国外へ出て活躍してほしいとも仰られていました。昔は金銭的な問題から、国際会議へ参加するのも難しかったが、今ならば比較的簡単に参加できるし、論文に関しても、テーマを細切れにした内容を国内論文誌に投稿するよりも、しっかりした内容の国際論文として通していくべき、とのメッセージを頂きました。

5.4 第 4 班：原島 博 先生、奥富 正敏 先生

- 班員：矢野高宏 (オリンパス株式会社)、浅井俊弘 (奈良先端科学技術大学院大学)、大池洋史 (和歌山大学)、澤野弘明 (早稲田大学)

- 担当委員：岡部孝弘 (東京大学)

5.4.1 原島 博 先生 (東京大学)

- 原島先生の大学時代

当時は学生運動の真っ直中で、教授は学生にかまっている暇がなく、研究テーマは自分で探すしかありませんでした。図書室に1週間こもって、5年分の情報論関係の論文をすべて1枚目だけコピーをとって、内容毎に分類して全体の研究動向を探るというようなこともやりました。

- 若手の頃を振り返って

研究そのものが楽しく、友人とお茶を飲みながら研究について議論ばかりしていました。一方で、難問を解いてしまうとそれだけで満足して、それを業績として外部発表することにはあまり関心がありませんでした。研究は発表しなければ他の研究者の役にたたないわけで、もっと論文を書くべきであったと反省しています。

- 若手研究者へのメッセージ

わくわくするような夢をたくさん持って下さい。文字通り夢物語であっても、夢のストックがあれば、必ずいつかは追い風が吹きます。ストックがなければ、風が吹いてもそれに気付きません。もう一つ大切なことは、新しい研究を始めたら、5年はしがみつ়くことです。一方で、10年頑張ったら惰性で研究していないか反省することも必要です。新鮮なわくわくがなければ、いい研究はできません。

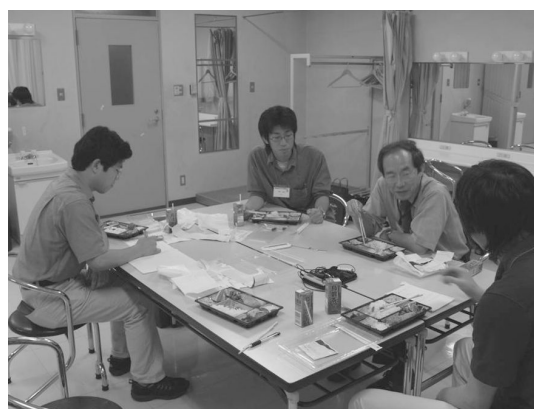


図 11 第 4 班と原島博先生

5.4.2 奥富 正敏 先生 (東京工業大学)

– CMU 時代はどのようなものでしたか？

少し極端に言うと、そこにいる周りの人や訪れる人の話を聞けば、自然に世界のトップレベルの研究に触れられるという感じで、研究にはとてもいい環境であり、自分の転機となった時期でした。私は企業から一定期間許されて、客員研究員としてそこで自由に研究をさせてもらいましたが、「ここでできなければ、何処に行ってもだめだろう」と思って真剣にやりましたね。

– 研究で煮詰まることはありませんでしたか？

あまりなかったと思います。もちろんすんなりとは進みませんでしたが、煮詰まったという意識がないのは、多分考えることが好きだからでしょうね。煮詰まっても気分転換を図るのではなく、逆にどんどん考えたいくなるタイプですから (笑)。

– 研究室の環境づくりについて、心掛けていることはありますか？

私が趣味でガーデニングをする時にも言える事ですが、植物を無理矢理生長させようと思ってもだめなわけで、土壌とか日照とかといった環境を整えてあげることが重要です。それと同様に、まず学生のやる気を引き出し、またやる気のある人がどんどん吸収・成長できるような環境を整えることが大事だと思います。

– ポスドクについてどう思われますか？

ポスドクは一時的なポジションですから、それ自体で良いかどうかは一概に言えません。大事なのは将来に繋げるための活動ができるかどうかだと思います。ですから、ポスドクを受け入れるときには、次の活動の場で引く手あまたになるような成果を出させることが、私の役目だと思っています。

– 若手研究者へのメッセージをお願いします。

まあ、今の状況でとりあえず頑張ることじゃないかな。そうすれば、たいていは思いもよらないところで、必ず何らかの道が開けますよ！



図 12 第 4 班と奥富正敏先生

5.5 第 5 班：白井 良明 先生、坂野 鋭 様

- 班員：中里祐介 (奈良先端科学技術大学院大学)、山本基夫 (オムロン株式会社)、松元郁佑 (和歌山大学)
- 担当委員：岩村雅一 (大阪府立大学)

5.5.1 白井 良明 先生 (立命館大学)

我々は大きく 3 つのことに白井先生にお話をうかがいました。1 つ目は MIT 時代のお話、2 つ目は ACCV を設立されたときのお話、3 つ目は若手へのメッセージです。

まず MIT についてですが、その当時のアメリカは日本と比べて計算機環境が整っていたため研究に集中できたそうです。また、海外では雑用がほとんど無く (今でもそのようです)、それも研究しやすい要因だったそうです。留学については、現在の日本は計算機環境も整っており、研究できる環境を自分で作り出すことができれば、必ずしも必要ではないと思うとおっしゃっていました。たとえば、雑用は夜に回して、頭の働く午前中に集中して研究すれば良いというアドバイスをいただきました。ただ、一流のところに行き、一度良い環境を見ておくのもよいとおっしゃっていました。

次に ACCV の設立時のお話については、当時のアジア諸国がそれほど裕福でなかったことが問題だったそうです。いかに会議の参加費を安くし、どう援助するかが問題で、それが解決できないと論文の投稿者が発表できない恐れがあったようです。また、当初はそれぞれの国でどの先生にお話をすればよいのかすらわからない状態でしたが、ヒューマンネットワークを活用して乗り越えることができたそうです。

最後に若手研究者へのメッセージをいただきました。「楽しようと思わずに自分を鍛えるようにしなければいけない。他のところにいつでも移れるような実力をつけるべきだ。同じ分野でずっとやっていると発想が固まってしまう。違った物の見方をするために 30 代くらいになったら、他の分野に転身することも大切。」

インタビューを通して我々の質問にしっかりと耳を傾けられ、非常に熱く語っていただけたことが印象に残りました。最後に、「自分ももっと若ければ、これからでもあえて難しい分野に飛び込むよ。楽をしてはいけない。」とおっしゃっていたのが印象的でした。未来を見ながら研究される方なのだなと強く感じたと同時に、私達も頑張らないといけないと強く思いました。



図 13 第 5 班と白井良明先生

5.5.2 坂野 鋭 様 (NTT データ)

インタビューのはじめに「坂野先生」とお呼びしたところ、「先生はやめてください」とおっしゃったため、以下、先生では

なく「坂野さん」としています。

坂野さんは、工学部ではなく理学部の出身。NTT データへ入社されてからは、認識に関する研究をされています。まず初めに、認識に関する研究をされている経緯についてうかがいました。「入社後、OCR をやれと言われて認識の研究を始めた。90年代は理論の研究が主流になってきており、数学や物理を学んだ自分にはその知識が凄く役立った。大学、いや昔から好きなこと以外やる気がなく、大学でも授業には行かず自分で数学と物理ばかり勉強していた。だから認識の話はかえってすごくなじみやすく、楽しい研究ができています。」と生き生きと語っていただけました。

学会や委員会など、様々なところで活躍されている坂野さんですが、インタビュー中、我々若手に対してこんなお話をされました。「色々な人と付き合うこと、話すこと。そうすることで、様々な意見を知り、多くを学ぶことができる。」社会に出て必要とされる力は、答えのない問題への(準)最適解を出せる力であって、その力をつけるためには、色々な人と話すことが必要だということです。では、どうやって色々な人と話すのか？坂野さんのお答えは明快です。「自分が価値ある情報を発信できるようになること。この人と話せば面白い！と思われれば友達が増えます。」MIRUの会期中も、坂野さんはいつも色々な方々とディスカッションしていらっしやいました。坂野さんの言葉には説得力があります。

インタビュー中は、量子力学(線形代数はこれで勉強されたようです)や、金融のブラックショールズ式など、様々な話題が登場しました。ご自分の専門分野に限らず、様々なことをよく知っていらっしやる、知的好奇心旺盛な方だということがよくわかりました。お話の中で、「実力が同じなら、好きなことをやっている方がパワーが出る！面白いことをやりましょう。」とおっしゃっていましたが、坂野さんのパワーの源は「楽しむこと」、これに尽きると思いました。

以上です。



図 14 第 5 班と坂野鋭様

5.6 第 6 班：八木康史 先生、牧 淳人 先生

- 班員: 手島知昭(慶應義塾大学), 陳 維英(九州大学), 坂上文彦(名古屋工業大学), 魏 大比(東京大学)
- 担当委員: 岩村雅一(大阪府立大学), 加藤 毅(東京大学)

5.6.1 八木康史 先生(大阪大学)

大阪大学入学のきっかけは「アトムが作りたかったから」とおっしゃるのは阪大教授の八木康史先生。全方位カメラの研究をはじめ、ロボットの移動制御やプラント点検の研究に従事されてきた方だ。阪大での学士、修士時代では苦労した思い出などなかったと言うほどの楽道家。そんな八木先生は今の修士の学生を見て「失敗しても良いから挑戦するチャレンジ精神を持ってもらいたい」と思われているようだ。そんな八木先生が全方位カメラと出会ったのは修士を修めた後の三菱電機勤務時代。当時(80年代)の三菱電機では本業をするかたわら、3割程度の余力を割いて「自由研究」をすることが許されていた。その自由研究が全方位カメラだった。我々が何故全方位カメラの研究をされたのか、と伺うと、「センサありきでなく、問題ありきの研究なんだよ」と八木先生はおっしゃられた。当時八木先生が行っていた研究はロボットの位置計測。全方位カメラを利用の方が通常のカメラより有利だったのだ。「無理にカメラにこだわるのではなく、問題を解くために手段を選ぶ」。確かにその通りである。最後に今の学生に対して「修士の2年間を就職活動や単位などの目先の未来のために無理に忙しくせず、もっとじっくりと長い目で研究をしてほしい」というメッセージを頂いた。こうしてインタビューは幕を閉じた。



図 15 第 6 班と八木康史先生

5.6.2 牧 淳人 先生(京都大学)

牧淳人先生(京都大学)には海外留学時(スウェーデン王立工科大学)および企業勤務時(東芝)の経験談を中心にお話を伺った。特に興味を惹かれたことは、留学先の研究環境の充実ぶり、就職活動時の談話であった。牧先生が留学されていたスウェーデンには、奨学金制度の充実など学費面で学生をサポートする仕組みがあるそうである。また、研究面に関しても専属のシステムアドミニストレータの配置など研究に専念しやすい環境が整えられていると感じられた。もっとも、奨学金に関しては単位取得に失敗すると打ち切られるなど、不真面目でいるとそれほどの恩恵を受けられないらしい。就職活動に関しては、意外にも(という失礼にあたるかもしれないが)日本国内の大学に就学している場合と同様に2度の面接を経て、スウェーデンと日本の往復という距離の問題はあったものの、一般の新卒として採用されている。就職時にはヨーロッパに留ま

る道もあったそうであるが、魅力的な企業（研究所）と出会ったことなどから「日本の企業で仕事に就けるチャンスである」と考えるようになり、志望されたそうである。その他にも様々な興味深いお話を頂き、最後に「これから皆さまが過ごされる20代後半や30代前半は色々なことができる大切な時期、（自己の反省に基づき）まとまった時間をとって後に残る仕事ができるならば今だと思ふことが大事」というメッセージを頂いてインタビューを終了した。



図 16 第 6 班と牧淳人先生

5.7 第 7 班：松山 隆司 先生，田中 弘美 先生

- 班員：植松裕子（慶應義塾大学），齋藤耕介（東北大学），西山正志（株式会社東芝）

- 担当委員：天野敏之（名古屋工業大学），玉木 徹（広島大学）

5.7.1 松山 隆司 先生（京都大学）

The Marr Prize を受賞されるなど コンピュータビジョン分野の世界的権威である。遠隔インタビューを京都大学川嶋先生の御協力の下，京都大学と MIRU 会場との間で行った。

– これまでの研究人生で一番成功した・失敗したと思うことは何でしょうか？

現状では成功したという実感はありません。これは「人間とは何か，知能とは何か」について情報学の立場からまだ十分理解ができていないからです。そういう意味では成功・失敗という結果はまだでていないと言えます。

– 研究に行き詰った時にどう対処していますか？

現時点で考えていることが全てではないと思うようにしています。アプローチは様々にあります。前向きに考え，自分の気持ちや思いがあれば必ず先に進めます。

– 若い頃に取り組んでおいた方がよいことはなんですか？

数学や物理など理論的な分野の考え方を学んだ方がよいと考えています。これらは，概念を表現したい時に必要です。例えば，動的なイベントをどうモデル化するかについて考える際，「なぜ時間は一方向にしか流れないのか？」ということを理解する必要があると考えています。この問いに答えるためには，理論的な分野の考え方が役に立つと考えています。

– 最後に，若手研究者へ向けて一言お願いします。

現在は夢を持ちにくい世の中（ex. 会社，法人）ですが，研究

者としての自分の思いを大切に，夢を追い求め，それをプロフェッショナルに実現できるよう頑張ってください。



図 17 第 7 班と松山隆司先生

5.7.2 田中 弘美 先生（立命館大学）

ロチェスター大学，大阪大学，ATR など，様々な研究機関に所属されご活躍されてきた。当初は MIRU へは参加されない予定であったが，このインタビューのために来て下さった。

– 結婚，子供，仕事，仕事での地位と，世の女性が憧れるものを全て手に入れていらっしゃいます。どのようにして手に入れられたのでしょうか？

私はとても運が良かったと思います。一番大きいのはやはり主人の協力があったことです。同じ研究者なので，状況をよく理解してくれています。きっと，普通のサラリーマンだったら，私のような奥さんはダメかも。（笑）高校の同級生だったこともあって，“同士”という感じでやってこられたことがとても良かったです。

– やはり環境に恵まれていたということでしょうか？

そう思います。まず，自由に研究させてくれた職場の環境がありました。また，主人の理解もそうだけど，両親が二人とも教職員で，私を『女の子だから〇〇しなさい』という風に育てたことはありませんでした。でも一方で，最終的には子供を持って幸せになってほしい，とも言われていました。それをうまく叶えられたと思います。

– 若手研究者へ向けて一言お願いします。

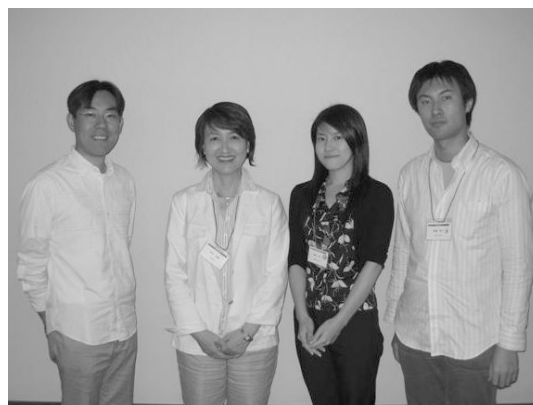


図 18 第 7 班と田中弘美先生

人生そんなに悪いようにはならないから、あまり色々考えすぎて心配しないこと！ まず、やってみることが大事です。色々なことがあるけれど、自分のせいにしすぎて落ち込んだりしないで、皆さんの能力なら必ず乗り越えられるから、頑張ってください。

6. 参加者アンケート結果概要

企画終了後、匿名でアンケートをとったところ 21 人から回答を得た。その結果を報告する。

● 縦のつながりは強化できたか？

- はい (18 人).
 - ・ インタビューをさせて頂いた先生や実行委員の先生方と知り合うチャンスをあつてとてもよかった。
 - ・ 面識のなかった先生と話す機会がもてたのはよかった。
- いいえ (3 人).
 - ・ 若手の中ではできた。上の先生方とはインタビュー以外で全く話せなかったのが残念。

● 横のつながりは強化できたか？

- はい (21 人).
 - ・ 自分と近い研究を行っている方たちと親しくなることができた。
 - ・ 宴会などの場を設けていただいたおかげでたくさんの方とお話することができた。
 - ・ グループを少数にまとめたのが良かった。
 - ・ 特に班のメンバーには、若手プログラム期間中のみならず、その前後にも連絡をとる必要があり、つながり強化という意味では非常に効果的だった。

● そのほか、参加してよかった点があればお書きください。

- 知人が増えてよかった (11 人).
 - ・ ディスカッションすることこそ、よい考えを生む源泉だと思うので、「話せる」機会を持ててよかった。
 - ・ この分野を担う次の世代となる先生方と知り合うチャンスを頂けて、非常にラッキーだった。
- 新たな経験ができた (3 人).
 - ・ まったく顔を合わせたことがない人たちとメールで打ち合わせを行い、インタビューを行う時にはじめてお会いするという、これまで行ったことの無い経験をすることができた。
- 新たな知識を得た (5 人).
 - ・ 普段は研究室の仲間との接点だけで、同じ感じ方・考え方に偏ってしまうが、今回他大学の方々と 4 日も一緒にいたことで、かなり刺激になった。
 - ・ 他分野に関する研究に触れることができた。
 - ・ インタビューした先生の人生、研究に関する考えを良く知ることができた。

- 特になし (2 人).
- 「こうしてほしかった」などの企画側の問題点があればお書きください。
 - 時間が短い (7 人).
 - ・ 打ち上げの時間と、発表の時間 (質問) の時間をもう少しとってほしかった。
 - ・ 委員の先生との会話がほとんど (全く?) なかったの、それもやればもっとよいと思った。
 - ・ 初日の相互インタビューやポスター発表の時間が短すぎた。
 - その他.
 - ・ メールでの打ち合わせだけでは雰囲気つかめず、うち解けにくかった気がする。
 - ・ 行事ごとに場所が変わるのは、少し混乱を招くと思った。
 - ・ 先生をお呼びしてインタビューするには厳しい場所だった。
 - ・ 途中でグループを入れ替えてインタビューをしてもよかった。
 - 特になし (7 人).
- 次回、若手プログラムでやってほしい企画があればお書きください。
 - 似たような企画にしてほしい (7 人).
 - ・ 事前に班分けして共同で準備しておくことは連帯感が増えてよかったので、そのようなタイプの企画がよい。
 - ・ 今回、少人数のグループによる活動が交流を深めるために有効だと感じましたので、次回の企画も少人数のグループ単位で活動できる企画を希望する。
 - ・ また、何年か後に突撃インタビューの企画を行なうとよい。
 - ・ 今回のように MIRU 本会議やそこに参加されている先生方と関わることでできるイベントがよい。
 - その他.
 - ・ 毎年開催。
 - ・ 今年、英語について議論がたくさんされていたので、英語を用いた企画があれば面白い。
 - ・ もっと参加者同士で行う企画が沢山あったらよかった。
 - ・ 論文の読み方、英語論文の書き方など。
 - 特になし (3 人).

7. ま と め

297, 219, 211, 170, 146, 142, 133. 本年 5 月頃から原稿執筆現在 (11 月 1 日) までに、全 7 班で取り交わされたメールの数を降順に並べたものである。多くのメールがインタビュー前の 2ヶ月程度の間に慌しく取り交わされたことを考えると、



参加者の間には相当密な事前交流があったことが数字的にもわかる。それだけ参加者には話し合わなくてはならない事項が多かったということでもあり、「横のつながり」強化に役に立ったのではないかと信じている。現在でも参加者間の交流は続いているようである。各班のメーリングリストはそのまま残してあり、そのメールは委員にも転送されるのであるが、時折、興味ある講演会の話や、「一緒に飲んだ」などというメールが流れてくるのは何とも嬉しいことである。

改めてまとめると、MIRU2006に併催し、若手プログラムを実施した。明日のCV・PR研究を担う若手研究者に人と人とのつながりの重要性を認識してほしいという目的の下、「突撃インタビュー！先人の成功と失敗に学ぼう」と題して、先輩研究者へのインタビューを行った。インタビューに先立ち、3~4名から成る班毎に希望インタビューの選定・アポ取り・履歴調査を行ってもらった。上述のように参加者にとってかなりの負担になったようであるが、「横のつながり」を強化するのに非常に有効であったと思われる。またインタビューにより先輩研究者が身近になり、「縦のつながり」を強化できたと思われる。特に、参加者の当日の様子やアンケートの結果からは、所期の目的の達成を信じさせるものがあつた。今回広がった人の輪、および今回培ったであろう「人の輪を広げたいという心意気」を、今後の研究活動においても最大限活用していただきたいと、実行委員一同、心から願っている。

以下、反省点について述べる。

- 募集の段階で企画の内容がわかりにくかった点は問題であった。インタビューをされると言われても、誰に何を聞いているのかわからないという意見を多く耳にした。2.2で述べたように、申し込み時のハードルも高くしており、その時点でつまづいた若手もいたと思われる。さらに、学術的な企画に比べ、何が得られるがわかりにくかったことも一因であろう。インタビュー例をホームページに掲載するなどの対応も行ったが、やはり実際にインタビューすることで得られる感動と、インタビュー内容を単に読んで受ける印象には乖離があり、集約的には難しい企画内容であったと思われる。今後類似の企画を実施する場合、こうした点に注意すべきであろう。一方で、「人との

つながりを広げたい」という強いパッションを持つ者だけが集まった感があり、旧来指摘されていたような参加者間の温度差はほとんど見られなかった。

- 班以外の参加者との交流時間がやや少なかった。班内の参加者とは準備のプロセスから実際のインタビュー、発表までを共同して行う必要があり、非常に親密になれたが、他の班の参加者とももう少し交流する時間が欲しかった、という声があつた。確かに参加者側には相当のパッションがあつたようなので、それを活かしてもう一工夫できた可能性はある。

謝 辞

本企画の遂行においては、本当に数多くの方々にご協力頂いた。

まず、以下に示す14名のインタビューの皆様には、深謝の意を表したい。

(五十音順)

池内 克史 先生	東京大学
奥富 正敏 先生	東京工業大学
坂野 鋭 様	NTT データ
佐藤 洋一 先生	東京大学
白井 良明 先生	立命館大学
田中 弘美 先生	立命館大学
原島 博 先生	東京大学
前田 英作 様	NTT
牧 淳人 先生	京都大学
松山 隆司 先生	京都大学
村瀬 洋 先生	名古屋大学
八木 康史 先生	大阪大学
横矢 直和 先生	奈良先端科学技術大学院大学
和田 俊和 先生	和歌山大学

若手研究者諸君が本企画を大いに楽めたのは、インタビューの皆様のご配慮と寛大さ、貴重な体験談の惜しみないご披露、そして若手に期待するお気持ちすべてであったことは間違いのない。本企画のためにMIRU2006にご参加頂いた方々もいらつしやると伺っている。皆様の本企画へのご理解・ご尽力に、参

加者ならびに実行委員一同，改めて感謝申し上げたい。なお，「非公式でなら」とインタビューをお引き受け下さった方もいらっしやった。お名前は差し控えさせていただくが，ここに感謝の意を表したい。

MIRU2006 実行委員の皆様にもお礼申し上げたい。特に村瀬洋実行委員長 (名古屋大学)，佐藤洋一プログラム委員長 (東京大学)，大町真一郎組織委員長 (東北大学)，目加田慶人財務委員長 (中京大学) には本企画を全面的にバックアップ頂いた。ここに心から謝意を表する。

金子俊一先生 (北海道大学) には，試行インタビューならびにその公開に快くご協力頂いた。また，日浦慎作 MIRU2004 若手プログラム実行委員長 (大阪大学) には，企画実施の注意点など経験者ならではの貴重なアドバイス頂いた。本企画に良き指針を与えて下さった両先生に，感謝申し上げる次第である。

このように非常に多くの方々のご協力により本企画を実施でき，また参加者諸君の笑顔に囲まれたことは，実行委員としてこの上ない喜びであった。本企画ではこの1年半で2,300件という尋常ではない数のメールが委員の間で取り交わされたが，それが報われた感があるのも，ご協力くださった皆様と参加者の皆様のお蔭であると信じている。本当にありがとうございました。

文 献

- [1] 清川 清，島田伸敬，日浦慎作，椋木雅之，森 健策，馬場口登，“MIRU2000 若手プログラム報告，” 信学技報，PRMU2000-145，Dec. 2000.
- [2] 蔵田武志，岩井儀雄，川西隆仁，北原 格，北本朝展，孟 洋，斎藤英雄，“PRMU 若手プログラム 2002 報告，” 信学技報，PRMU2002-134，Dec. 2002.
- [3] 天野敏之，浮田宗伯，岡部孝弘，佐川立昌，日浦慎作，“MIRU 若手プログラム 2004 報告，” 信学技報，PRMU2004-141，Dec. 2004.
- [4] 立花隆編，二十歳のころ (1) 1937 - 1958—立花ゼミ『調べて書く』共同製作，新潮文庫，2001.
- [5] 立花隆編，二十歳のころ (2) 1960 - 2001—立花ゼミ『調べて書く』共同製作，新潮文庫，2001.